

日本語の数量詞と2次述部

李 昇祐

要 旨

日本語の数量詞は文の中で名詞句と一見叙述関係があるように見えることから2次述部として扱われているが、それを裏付ける根拠は不十分である。そこで本稿は、数量詞の2次述部としての可能性を検討しながら、統語的・意味的な面から両者を比較する。両者の統語的な側面から、数量詞と2次述部 (状態記述2次述部、結果2次述部) は異なる成分であることを示す。さらに、意味的な側面からは、数量詞が一見名詞句と叙述関係を結んでいるようにみえても、2次述部ではないことを明らかにする。

キーワード

数量詞 状態記述2次述部 結果2次述部 数量詞遊離 部分量 全体量

1 はじめに

2次述部 (Secondary Predicate) とは、(1) の「裸足で」、(2) の「白く」のように、文の述語とは別に、もう一つの叙述関係を成すものである。(1) の「裸足で」は状態記述2次述部で、名詞句「太郎」と叙述関係を結んでおり、(2) の「白く」は結果2次述部で、名詞句「壁」と叙述関係を結んでいる。

(1) a. 太郎が裸足でタコを食べた。(状態記述2次述部)

b. 太郎が裸足だ。

(2) a. 花子が壁を白く塗った。(結果2次述部)

b. 壁が白い。

一方、数量詞 (Numeral Quantifier) とは (3) の「3人」、(4) の「2冊」のように、名詞句の数量を具体的に表すものである。

(3) 学生が3人本を買った。(数量詞)

(4) 学生が本を2冊買った。(数量詞)

数量詞は、ある意味で名詞句の状態を表していることと、名詞句から離れても名詞句との関係性を維持していることで、2次述部に似ているところがある。数量詞を2次

述部として分析した研究がいくつもあるが、両者の性質は完全に一致するはいえない。

(5) 太郎がタコを裸足で食べた。

(6) *学生が本を3人買った。

(5)の「裸足で」は主語の状態を表しているが、目的語の後ろに現れることができる。これに対して、(6)の「3人」は主語の数量を表しているが、目的語の後ろに現れることができない。このように、数量詞と2次述部は確かに似てはいるが、同じものとはいきれないところがある。

そこで本稿では、数量詞と2次述部の振舞いを統語的・意味的に分析し、数量詞を2次述部として捉えられるか検討する。

2 先行研究

数量詞を2次述部として扱っている研究としてはMiyagawa (1988) やMiyamoto (1996) などが挙げられる。

Miyagawa (1988)

Miyagawa (1988) は、数量詞が持つ述語性 (Properties of Predication) を記述した論文で、数量詞を述語として試している¹。その根拠として、以下の3つの現象を挙げている。

(7) First, the small clause and the NQ are syntactically separate from the NP they modify. Second, neither the small clause nor the NQ is an argument of the verb, in that the verb does not assign a thematic role to them. Finally in both, the most common NP's that can be modified are subject and object.

(Miyagawa 1988: 158)

Miyagawa (1988) では、数量詞を (8)、(9) のように小節を構成する述部、すなわち2次述部とみなしているが、2次述部の中で、状態記述2次述部、結果2次述部とどのように関係付けるかについては触れていない。

(8) a. John ate the meat raw.

b. The meat was raw.

(9) a. John ate the meat nude.

¹ "The fundamental assumption will be that the NQ is a "predicate," hence subject to the syntactic and semantic conditions imposed by the theory of predication." (Miyagawa 1988: 158)

b. John was nude.

Miyamoto (1996)

Miyamoto (1996) はMiyagawa (1986) などの議論を根拠にして数量詞は2次述部であると認めた上で²、主述部がstage-levelかindividual-levelかによって数量詞の遊離が決まると述べている。Miyamoto (1996) はMiyagawa (1988) で出された根拠に加えて、日本語の数量詞は (10) の「3人だ」のように「数量詞+コピュラ」の形で述語として機能できることから、日本語の数量詞は述語であると述べている³。

(10) 生徒が3人だ。

(P. 322)

以上のMiyagawa (1988) とMiyamoto (1996) で指摘されている事実は妥当であるが、それが「数量詞=2次述部」を保証するとはいえない。(11) の「風邪で」は (11b) が成り立っていても2次述部とは言わない。すなわち、Miyagawa (1988) とMiyamoto (1996) の数量詞が2次述部である根拠に当てはまる成分すべてが2次述部として認められているわけではない⁴。確かに (8) の「3人」は修飾する名詞句から離れていて、1次述部「買った」から要求される項でもなく、主語を修飾している。さらに、「学生が3人だ」も文法的な文である。

(11) a. 太郎は風邪で欠席した。

b. 太郎は風邪だ。

(12) 学生が3人本を買った。

ところが、2次述部が先行研究で指摘しているような振る舞いを見せているのは事実である。もし、数量詞を2次述部とみなすのなら、数量詞がどの2次述部であるかまで考えなければならない。2次述部は、状態記述2次述部と結果2次述部があるが、数量詞がその中でどれに属するかはまだ明確にはされていない。数量詞を2次述部として扱う研究でも、数量詞がどのような2次述部かについてまで述べている研究は管見の限り見当たらない。数量詞は動詞と意味的に関わりを持っておらず、動作が行われた後の結果状態でもないの、一見状態記述2次述部に属するようにも見える。しかし、後述するように、数量詞と状態記述2次述部には相違点が少なくない。数量詞が

² Miyagawa (1988a, 1988b, 1989) and Ueda (1986) provide various pieces of evidence to show that FQs are secondary predicates (SPs).

³ Miyamoto (1996) ではさらに、これと対比して、英語の数量詞は述語ではないと述べている。

*The students are three.

⁴ これについては後述する。

状態記述2次述部の一種であれば、その相違点に関しても記述すべきであろう。

そして、もし数量詞が他の2次述部との相違点から状態記述2次述部でも結果2次述部でもないのであれば、考えられるのは、今までは言われていなかった第3の2次述部の可能性と2次述部ではない可能性である。本稿ではこの3つの可能性 (既存の2次述部に属する可能性、第3の2次述部の可能性、副詞成分の可能性) を念頭に入れて、まずは数量詞が2次述部であると仮定して議論を進めていくことにする。

最終的な結論をここで先に述べると数量詞は2次述部ではなく副詞成分であると思われる。それを裏付ける証拠について次章から述べていくことにする。3節では数量詞と2次述部の統語的な違いから数量詞が状態記述2次述部でも、結果2次述部でもないことを確認し、4節では数量詞が第3の2次述部とみなせない理由を示す。

3 数量詞と2次述部の統語的な違い

数量詞を2次述部であると仮定すると、2次述部の中でどれに属するかという疑問が浮かび上がる。しかし、数量詞と2次述部を統語的に比較してみると、既存の2次述部との違いが明確になる。これからはその違いについて述べる。

その前に、まず2次述部の定義を考えてみることにする。竹沢 (2000) では2次述部を以下のように記述している。

- (13) 2次述部とは、その述部以外の要素 (主動詞) から意味役割を付与される名詞句に対して新たな叙述を付加する場合の述部を指す。

(竹沢 2000: 238)

これによると、2次述部として認められるためにはまず文の名詞句 (主語もしくはは目的語) と叙述関係が成立しなければならない。ここでいう「叙述 (Predication)」とは、述部とその述部の主語となる名詞句とのリンキングである⁵。また、「述部」については、Rothstein (1983) の定義⁶に従うことにする。

3.1 形式上の差

数量詞と2次述部の違いとして、まず上げられるのは形式上の差である。

状態記述2次述部は必ず「名詞+デ」の形で現れ、結果2次述部は形容詞の連用形で現れる⁷。しかし、数量詞は「数詞+助数詞」の形を取る。

- (14) a. 学生が本を2冊買った。

⁵ 竹沢 (2000)

⁶ an open one-place syntactic function requiring saturation

⁷ 竹沢 (2000)

- b. *学生が本を2冊で買った。
- c. *学生が本を2冊に買った。
- (15) a. 学生が3人本を買った。
- b. 学生が3人で本を買った。
- (16) 太郎が裸足でタコを食べた。
- (17) 太郎が壁を白く塗った。

(15b) は一見、(14b) とは違って文が成り立つように見えるが、(15a) と意味が違うので数量詞は「数字+助数詞+デ」の形式は取れないといえる。さらに、状態記述2次述部は格助詞「デ」のない形式では現れず、結果2次述部は形容詞の連用形以外の形式では現れない。

したがって、数量詞は状態記述2次述部とも結果2次述部とも違う形式を取っている。

3.2 生起位置のヴァリエーション

数量詞は、数量詞移動によって3つの形で現れるが、2次述部にはこのようなヴァリエーションは見られない。

- (18) a. 昔ある所に仔豚3匹が住んでいました。
- b. 昔ある所に仔豚が3匹住んでいました。
- c. 昔ある所に3匹の仔豚が住んでいました。

(奥津1983: 1)

奥津 (1983) ではこの3つのタイプを以下のように呼んでいる。

- (19) a. NQC型 (名詞+数量詞+格助詞) 「仔豚3匹が」 (17a)
- b. NCQ型 (名詞+格助詞+数量詞) 「仔豚が3匹」 (17b)
- c. QノN型 (数量詞+ノ+名詞) 「3匹の仔豚」 (17c)

(奥津1983: 2)

状態記述2次述部の場合、「QノN型」、「NCQ型」と似た語順はあるが、これは数量詞と似てはいるものの形式的には同じではない。

- (20) a. 友達がワインを2本買って来た。
- b. 友達が2本のワインを買って来た。
- (21) a. 太郎が裸足でタコを食べた。
- b. 裸足の太郎がタコを食べた。

- c. *裸足での太郎がタコを食べた。
- (22) a. 太郎がタコを生で食べた。
b. 太郎が生のタコを食べた。
c. *太郎が生でのタコを食べた。

状態記述2次述部も「QノN型」、「NCQ型」と同じ語順になっているように見えるが、「裸足で」と「生で」は名詞の前に位置する時は、助詞デが現れない。数量詞は(20)で確認できるように、「QノN型」のQと「NCQ型」のQの形がまったく同じである。

(21)、(22)のデとノをコンピュータの活用形とみなし、デがノに変わったことにすると(20b)が文法的で、(22c)が非文法的な文になることが説明できるが、李(2008)では状態記述2次述部のデはコンピュータの活用形ではなく格助詞であると述べた⁸。

さらに、注目したいのはNQC型である。2次述部にはこれと似た形式は存在せず、(23a)～(23d)は非文である。

- (23) a. *太郎裸足がタコを食べた。
b. *太郎裸足でタコを食べた。
c. *太郎がタコ生を食べた。
d. *太郎がタコ生で食べた。

数量詞も、2次述部も「XはYだ」(X=名詞句)という形は成り立つが、2次述部にはNQCのような形式がなく、生起位置のバリエーションで両者の差が見られる。これは2次述部と数量詞は別のものであることを示唆していると思われる。

3.3 遊離可能なNPの種類の違い

数量詞は主語、目的語以外の名詞句から遊離する場合がある。神尾・高見(1998)によれば、主題として取り立てることができる名詞句は、数量詞遊離を許す。

- (24) a. 会社訪問で、先週、地元の企業に行ってきた。
b. 会社訪問で、先週、地元の企業に3つ行ってきた。
c. その地元の企業は、会社訪問で先週行ってきた。
- (25) a. 私が団体客を泊める宿屋に当たってみた。
b. 私は、団体客を泊める宿屋に2、3軒当たってみた。

⁸ 李(2008)で状態記述2次述部のデがコンピュータではなく格助詞であることを、かき混ぜ、取り立て詞「だけ」の挿入、接続助詞「なら」との共起関係の3つの現象で確認した。詳しくは李(2008)を参照されたい。

- c. その団体客を泊める宿屋は、私が当たってみた。
- (26) a. 閣僚が訪問先の国から戻ってきた。
- b. *閣僚が、訪問先の国から3つ戻ってきた。
- c. *その訪問先の国は、閣僚が戻ってきた。

(神尾・高見1998: 188~189)

名詞句が主題化できる (24b) の「3つ」と (25b) の「2、3軒」は遊離できるが、主題化ができない (26b) の「3つ」は遊離できない。このように数量詞の場合、主語、目的語以外の名詞句でも数量詞遊離が許される。主語、目的語ではない成分から数量詞が遊離する現象は既に井上 (1978) でも指摘された現象で、井上 (1978) はこのような成分を「副目的格」と呼んで、副目的格からは数量詞が遊離できることも指摘している。副目的格と捉えることが妥当かどうかは別にして、本稿では主格、目的格以外の格から数量詞が遊離できることに注目したい。状態記述2次述部、結果2次述部は主格、目的格以外の名詞句を修飾することはできないので、(24)~(26) の例は数量詞が2次述部とは異なるものであることを示すといえる。

3.4 かき混ぜ

次は、かき混ぜの制約である。2次述部は文の中で比較的自由に移動できる。

- (27) a. 太郎が裸足で花子を追いかけた。
- b. 裸足で太郎が花子を追いかけた。
- c. 太郎が花子を裸足で追いかけた。
- (28) a. 太郎が生でタコを食べた。
- b. 生で太郎がタコを食べた。
- c. 太郎がタコを生で食べた。
- (29) a. 太郎が壁を白く塗った。
- b. 太郎が 白く壁を塗った。
- c. (?)白く太郎が壁を塗った⁹。

以上で確認できるように、2次述部は状態記述2次述部、結果2次述部共に、文頭、叙述する名詞の前後に移動できる。

しかし、数量詞は2次述部に比べて、移動にかなり厳しい制約がある。

⁹ (29c)は、人によって違和感があると判断する母語話者もいるが、(30c)、(31c)に比べてみると、その許容度の差は明確である。

- (30) a. 学生が3人本を買った。
b. *学生が本を3人買った。
c. ??3人学生が本を買った。
(31) a. 友達が2本ワインを買ってきた。
b. 友達がワインを2本買ってきた。
c. ??2本友達がワインを買ってきた。

(30) の「3人」はそれが修飾する主語「学生」の後ろ以外に移動した時は許容度が落ちる。(31) の「2本」は目的語「ワイン」の前後には移動できるが、文頭に移動すると許容度が落ちる。このように数量詞の移動は、状態記述2次述部とも結果2次述部とも違った振る舞いを見せている。

以上で、数量詞と既存の2次述部の統語的な違いを確認した。このような違いを考慮すると、数量詞は既存の2次述部に属さないと考えるのが妥当であろう。しかし、数量詞が第3の2次述部である可能性がまだ残っているので、数量詞が2次述部の可能性を否定することはまだできない。そこで、次節では、数量詞と2次述部の意味的な違いを考察して、数量詞の第3の2次述部の可能性について考えることにする。

4 数量詞と2次述部の意味的な違い

本節では、まず、数量詞と既存の2次述部を意味的に比較してみる。その上で、数量詞が第3の2次述部ではなく、副詞成分であることを明らかにする。

4.1 数量詞と既存の2次述部の意味的な違い

- (32) 学生が3人本を買った。
(33) 花子が壁を白く塗った。
(34) 学生が裸足でタコを食べた。

(32) の「3人」は「学生が3人だ」という叙述関係を持っていて、さらに、「3人」は学生が来た時、学生たちの状態であるということも可能であろう。(33) の「白く」は結果2次述部であり、「白い壁」は「壁を塗る」行為の結果である。これに比べてみると、(32) の「3人」は「買う」行為の結果ではないので、「3人」は結果2次述部であるとは考えられない。他方、(34) の「裸足で」は状態記述2次述部であり、主語「学生」の状態である。(32) は「学生が3人だ」、(34) は「学生が裸足だ」のような文が成立することから、両者は似ているようにも見える。Miyamoto (1996) でも、これを数量詞が2次述部である根拠として出している。しかし、「XはYだ」(X=名詞句)が成立するからといって、Yが必ず2次述部であるとは限らない。

- (35) a. 太郎は風邪で欠席した。
- b. 太郎は風邪だ。
- c. 太郎は事故で欠席した。
- d. ?太郎は事故だ。

(35a) の「太郎」と「風邪」は (34b) のように、一見叙述関係が成り立つように見えるため (35a) の「風邪で」を2次述部のように考えやすいが、(35a) の「風邪で」は状態でも、結果でもなく、原因とみなされる。「原因のデ」がを次述部としてみなすことのできない大きな理由は「原因のデ」がすべて (35b) のように叙述関係が成立するわけでないからである。(35c) の「太郎」と「事故で」は (35d) のようにウナギ文と解釈しない限り不自然な文であり、叙述関係があるとはいえない。

名詞句と、1次述部以外にその名詞句と叙述関係を持つ成分がどのような関係にあるかは2次述部か否かを判断する重要なことではある。しかし、一見叙述関係があるように見えても、2次述部ではなく副詞成分としてみなされる場合がある。したがって、数量詞を2次述部としてみなすには慎重になるべきである。

そこで、次項では、数量詞が2次述部ではない可能性について考えてみる。

4.2 全体量と部分量

井上 (1978)、奥津 (1996) は、数量詞の全体数量と部分数量について述べている。

- (36) a. その3本の鉛筆をください。
- b. その鉛筆を3本ください。

(奥津 1996: 96)

(36a) の「3本」はそこにある鉛筆のすべての数量であるのに対して、(36b) の3本は会話が行われた場所にある鉛筆の一部であり、会話場面にある鉛筆の数量は少なくとも4本以上である。

- (37) a. その鉛筆は3本だ。 (その鉛筆の数量=3本)
- b. *その鉛筆は3本だ。 (その鉛筆の数量>3本)

(37a) のように数量詞が全体量を表す場合は「その鉛筆は3本だ」のような叙述関係が成立するが、(37b) のように数量詞が部分量を表す場合は「その鉛筆は3本だ」のような叙述関係が成立しない¹⁰。叙述関係が成立しないということは、(37b) の「3本」

¹⁰ 井上 (1978) はこれを根拠に (37b) のように全体量を表す文は (37a) のように部分量を表す文

は2次述部とみなせないことを意味する。これとは対照的に、2次述部はその名称「述部」からもわかるように、文の中で修飾している名詞句と叙述関係を結ばなければならない。Miyagawa (1988) で指摘された述語の特性を数量詞が持っていたとしても、名詞句と叙述関係を持たない以上、数量詞は2次述部として認めることはできない。

この点について先行研究では触れられていなかったが、数量詞が名詞句と叙述関係を持たないことを示唆しているのである。

以上、本節では数量詞と2次述部の意味的な側面を考察してきた。数量詞は名詞句から遊離することで部分量を表すようになる時がある。これは名詞句と数量詞の叙述関係が成立しないことを意味し、数量詞は2次述部ではないことを強く示していると思われる。

5 おわりに

以上で、数量詞が2次述部ではないことを明らかにした。数量詞は2次述部であると言われながらも、どのような2次述部であるかは明確にされてこなかった。本稿では統語的な側面から数量詞は既存の2次述部と異なることを明確にし、意味的な側面から数量詞は名詞句と叙述関係を持たないことを明らかにした。

数量詞が2次述部ではないなら、考えられるのは副詞成分とみなす捉え方である。しかし、「数量詞が2次述部ではない＝副詞成分」と主張するにはまだ無理がある。数量詞が修飾するのはイベントではなく名詞句であるため、名詞との強い関連性を持っているのも明確な事実であり、その点から一般的な副詞とは大きな違いがある。

(38) a. バットを3回振った。

b. ホームランを2本打った。

既に矢澤 (1985) で指摘されたように、「3回」、「2本」を名詞だけと関連付けるのではなく、「バットを振った」「ホームランを打った」という動作の結果、すなわち達成量として考えることもできるが、これを主張するためには、もっと明確な根拠が必要である。数量詞と名詞句との関わりはそれが偶然でなければ、どのようにして名詞句と関わりを持つのかについても記述するべきである。さらに、Miyagawa (1988) では数量詞の構造的な位置についても述べているが、本稿では構造については触れられなかった。この点も補わなければならないところだと思われる。

本稿では、数量詞が2次述部ではないことを明らかにするに留まり、数量詞をどのような成分として扱うべきかにまでは明確に答えていない。この問題については今後

から数量詞移動よって変形された文ではないと述べている。数量詞が移動したか否かで井上 (1978) と奥津 (1996) の主張が分かれていくが、本稿で深く立ち入らないことにする。あくまでもここで注目したいのは数量詞の移動ではなく、(37b) の「その鉛筆」と「3本」が叙述関係を成していないことである。

の課題にしておきたい。

参考文献

- 井上和子 (1978) 『日本語の文法規則』大修館書店.
- 神尾昭雄・高見健一 (1998) 『日英語比較選書2 談話と情報構造』研究社出版.
- 奥津敬一郎 (1969) 「数量的表現の文法」 『日本語教育』 14: 42-60.
- (1983) 「数量詞移動再論」 『人文学報』 第160号: 1-24.
- (1996a) 「連体即連用? 第3回数量詞移動 その一」 『日本語学』 15-1: 112-119.
- (1996b) 「連体即連用? 第3回数量詞移動 その二」 『日本語学』 15-2: 95-105.
- 北原博雄 (1997) 「連用用法の数量詞が表す数量について」 『言語』 26-3: 98-103.
- 木村宜美 (2003) 「遊離数量詞の構成素性について」 『弘前大学人文社会論叢 人文科学編』 9: 129-144.
- 木村宜美 (2005) 「遊離数量詞と述語」 『弘前大学人文社会論叢 人文科学編』 13: 41-51.
- 竹沢幸一 (2000) 「日本語の状態記述二次述部と品詞分類—記述的考察を中心に—」 『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書』: 237-263.
- 矢澤真人 (1985) 「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」 『学習院女子短期大学紀要』 23: 96-112.
- 李昇祐 (2008) 「状態記述2次述部と「で」」 『日本語と日本文学』 47: 70-80.
- Harada, Shinichi (1976) Quantifier Float as a Relational Rule. *Metropolitan Linguistics* 1: 44-49.
- Miyagawa, Shigeru (1988) Predicate and Numeral Quantifier. In: W. Poser (eds.), *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, 157-192. Stanford: CSLI Publications.
- (1989) *Syntax and Semantics 22 Structure and Case Marking in Japanese*. New York: Academic Press.
- Miyamoto, Yoichi (1996) "Floating Quantifiers and the Stage/Individual-Level Distinction," *Japanese/Korean Linguistics* 5, 321-335. Stanford: CSLI Publications.
- (李昇祐 筑波大学大学院生)

Japanese Quantifiers and Secondary Predicates

Seungwoo RHIE

This paper examines whether Quantifiers are a type of Secondary Predicates or not. Miyagawa (1988) and Miyamoto (1996) analyze that Quantifiers are Secondary Predicates. But the evidence of Miyagawa (1988) and Miyamoto (1996) is not enough to prove that Quantifiers are Secondary Predicates.

So, first we observe that the syntactic and semantic differences between Quantifiers and Secondary Predicates. Then, we argue that Quantifiers are not Secondary predicates.

There are four syntactic differences which prove that Quantifiers are neither Depictive Secondary Predicates nor Resultative Secondary Predicates. First, the forms of Quantifiers and Secondary Predicates (Depictive / Resultative) are different. Second, the locations of Quantifiers are more various than Secondary Predicates. Third, Quantifiers have more NP types to be floated than Secondary Predicates. Finally, the scrambling of Quantifiers is more restricted than secondary predicates.

Also there are semantic differences. The meaning of Quantifiers is different from the meaning of Secondary Predicates. And the floated Quantifiers don't have total quantity meaning but partial quantity meaning. The predications have only total quantity meaning. The partial quantity meaning of the floated Quantifiers is the clear evidence that Quantifiers are not Secondary Predicates.